

SER no.037; 序文

著者	石森 秀三
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	37
ページ	1-4
発行年	2003-03-14
URL	http://hdl.handle.net/10502/1539

序 文

石森秀三

1960年代以降におけるマスツーリズム（大衆観光）の隆盛化に伴って、自然環境の破壊、文化遺産の劣化、伝統文化の誤用と悪用、地域社会の階層分化、犯罪や売買春の増加などの「負のインパクト」が世界各地で顕著に生じるようになった。そのために、1980年代に入ると、マスツーリズムに代わる「もう一つの観光」や「適正観光」や「責任を担える観光」などが模索されるようになり、さらに1990年代以降は「維持可能な観光」の創出がグローバルな課題になっている（石森 2001b）。ところが、21世紀にはさらなる国際観光の量的拡大が予測されており、とくにアジア諸国において2010年代に観光ビッグバン（大爆発）が生じる可能性が大である。21世紀におけるウルトラ・マスツーリズムの発生にそなえて、世界中の観光研究者は「維持可能な観光」の研究に精力的に取り組んでいるのが現状である（石森 2001a）。

国立民族学博物館では、1998年に研究部改組が行われ、新たにグローバル現象研究や応用民族学研究や超領域研究などの先端的研究分野を担うために「先端民族学研究部」が設置された。私は、この新しい研究部でグローバル現象研究部門を担当することになり、観光開発に伴う諸問題をグローバルな視野のもとで調査・研究を行なってきた。1999年には、「自律的観光の総合的研究」という新しい共同研究を立ち上げ、総合的な視野のもとで維持可能な観光の研究に着手した。

共同研究「自律的観光の総合的研究」が目指していたのは、地域社会の人々や集団が固有の地域資源（自然環境や文化遺産など）を主導的かつ自律的に活用することによって生みだしている観光のあり方を実証的に研究することであった。「維持可能な観光」という概念は曖昧であるために、それに代わって「自律的観光」という新しい観光概念を提起して、21世紀における望ましい観光のあり方を総合的に共同研究することが意図されていた。

総合的研究を目指しているので、必然的に多岐にわたる研究分野から優れた研究者が共同研究に参加していた。民族学や文化人類学の分野だけではなく、都市計画学、社会学、民俗学、経済学、環境計画学、考古学、経営学、観光デザイン学、比較文明学、観光マーケティング論、国際協力論、演劇論など、多岐にわたる分野から研究者が参加していた。さらに、必要に応じて、特別共同研究員を毎回招待することによって、より充実した共同研究が行えるように配慮がなされていた。また、さまざまな学問分野で観光研究を進めている大学院生のオブザーバー参加を奨励しているために、毎回、多数の若手研究者が討論に加わることによって、次世代への学問の継承も意図されていた。2001年4月に京都嵯峨芸術大学芸術学部観光デザイン学科が創設されたが、その学科の主要メ

ンバーはこの共同研究の参加者であり、日本初の「観光デザイン学科」の創設にも貢献している。いずれにしても、多岐にわたる分野の研究者が参加したことによって、刺激に富み、かつ実り多い共同研究の展開が可能になった。

共同研究の初年度（1999年度）には、自律的観光の事例として、エコツーリズムとヘリテージ・ツーリズムを主として取り上げて、毎回の共同研究会において、実証的データにもとづく研究発表が積み重ねられてきた。次年度（2000年度）においては、アーバン・ツーリズム、島嶼世界における観光開発、エコミュージアムなどが取り上げられ、最終年度（2001年度）には前年度のテーマのほかに「観光をめぐるジェンダー」の問題などが取り上げられた。

共同研究「自律的観光の総合的研究」では、すでに2つの研究成果が刊行されている。一つは、ヘリテージ・ツーリズムにテーマをしばった研究成果であり、西山徳明氏（九州芸術工科大学助教授）と私との共編で『ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究』（国立民族学博物館調査報告第21号）が2001年に刊行されている（石森・西山 2001）。もう一つは、エコツーリズムに焦点を当てた研究成果で、真板昭夫氏（京都嵯峨芸術大学教授、観光デザイン研究センター所長）と私の共編で『エコツーリズムの総合的研究』（国立民族学博物館調査報告第23号）が2001年に刊行されている（石森・真板 2001）。

この調査報告は、共同研究「自律的観光の総合的研究」の3番目の成果で、観光をめぐるジェンダーの諸問題に焦点を当てたものである。共編者の安福恵美子さんは現在、平安女学院大学現代文化学部教授であるが、それ以前は阪南大学国際コミュニケーション学部教授として、観光コミュニケーション論の研究に従事してきた。安福さんは、日本の観光研究者のなかでは最も早くに観光をめぐるジェンダーの諸問題の重要性に気づき、研究を重ねてきている（安福 1997, 2001a, 2001b）。

この調査報告では、まずはじめに安福さんが観光とジェンダーをめぐる諸問題について概説を行なっている。観光とジェンダーに関する研究が本格的に始められたのは1990年代の半ばのことであり、まだ日が浅いことが明らかにされるとともに、観光のマーケティングにおける女性性、観光における女性労働、観光による女性のエンパワーメント、地域社会におけるジェンダー関係、ダイナミックな概念としてのジェンダーなどが詳しく論じられている。

日本の農山漁村で展開されているグリーン・ツーリズムに焦点を当てて、ジェンダーの諸問題を分析したのは、後藤澄江さん（日本福祉大学社会福祉学部教授）と工藤雅世さん（青森大学社会学部助教授）である。後藤さんは、グリーン・ツーリズムはホストに対して「自律的観光」と「男女共同参画型観光」という側面を保持し、ゲストに対して「能動的観光」という側面を保持していることを明らかにしたうえで、ジェンダー、エンパワーメント、パートナーシップという視点から、グリーン・ツーリズムにおける男女共同参画型観光の可能性が検討されている。一方、工藤さんは、青森県名川町にお

けるグリーン・ツーリズムの調査結果にもとづいて、そのような観光のあり方がホスト社会の女性の意識や行動に与える影響を、女性の個人史や家族の生活特性などに焦点を当てながら明らかにしている。

観光における女性労働の問題に焦点を当てたのは、塩路有子さん（阪南大学国際観光学科専任講師）と才津祐美子さん（大阪大学大学院博士課程）である。塩路さんは、英国のコッツウォルズ地域での長期にわたるフィールドワークの成果にもとづいて、民宿経営における男女の労働内容とその関係性を民族誌的に記述するとともに、女性の役割を多面的に明らかにしている。一方、才津さんは、岐阜県白川村における長期のフィールドワークの成果にもとづいて、文化遺産の保存・活用装置としての民宿に焦点を当てて、その経営のあり方や女性労働の実態を明らかにしている。

観光開発におけるジェンダーの問題を取りあげたのは、横村久子さん（京都女子大学現代社会学部教授）と松島泰勝さん（東海大学海洋学部助教授）である。横村さんは、日本におけるエコツーリズムやグリーン・ツーリズムの事例にもとづいて、自律的観光と女性のエンパワーメントの諸相を明らかにしている。一方、松島さんは、ミクロネシアのパラオでの長期にわたるフィールドワークにもとづいて、内発的な観光開発を実現するための制度の存在や伝統的首長の活動を明らかにするとともに、パラオの女性が観光開発で果たす役割を分析している。

さらに、工藤泰子さん（大阪学院短期大学非常勤講師）は京都観光に焦点を当てて、ジェンダーの視点から観光主体の変化、京都のイメージ、女性ホスト・ゲストの相互作用を明らかにしている。また、杓谷茂樹さん（南山大学非常勤講師）は、メキシコのユカタン州におけるフィールドワークの成果にもとづいて、「マヤ文明」イメージの女性性と観光の関係を詳細に分析している。かつての植民地的状況のもとにおいて、欧米人がマヤ遺跡に求めてきた「女性性」という概念を提示しながら、世界遺産であるチチェン・イツァ遺跡をめぐる考古学と観光開発のせめぎあいを取りあげるなかで、観光イメージにおけるジェンダーの問題を明らかにしている。

最後に、心理学者の山下京さん（大阪大学大学院人間科学研究科助手）は、ゆとりと観光行動の関係に焦点を当てて、富裕性、時間自由性、環境快適性、有能性、満足安定性、遊楽性、挑戦性、自由奔放性などの8因子にもとづいて、ゆとりと観光行動の関係にみられる性差を詳細に分析している。

本調査報告の刊行にあたって、論文を執筆いただいた共同研究員およびオブザーバー参加の研究者の皆様方にご協力をご感謝しておきたい。また、本調査報告の編集作業において、全面的にお力添えをいただいた吉村美恵子さんに深甚なる謝意を表しておきたい。

文 献

石森秀三

2001a 「内発的観光開発と自律的観光」石森秀三・西山徳明編『ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究』(国立民族学博物館調査報告21), pp.5-19。

2001b 「21世紀における自律的観光の可能性」石森秀三・真板昭夫編『エコツーリズムの総合的研究』(国立民族学博物館調査報告23), pp.5-14。

石森秀三・真板昭夫編

2001 『エコツーリズムの総合的研究』(国立民族学博物館調査報告23)。

石森秀三・西山徳明編

2001 『ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究』(国立民族学博物館調査報告21)。

安福恵美子

1997 「観光と女性——研究の現状と動向」『東横学園女子短期大学女性文化研究所紀要』6, 37-53。

2001a 「ヘリテージ・ツーリズムのダイナミズム——相互作用の場としてのヘリテージ」石森秀三・西山徳明編『ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究』(国立民族学博物館調査報告21), pp.143-152。

2001b 「エコツーリズムという概念に対する一考察——マス・ツーリズムとの共生関係に向けた視点から」石森秀三・真板昭夫編『エコツーリズムの総合的研究』(国立民族学博物館調査報告23), pp.101-109。